

## 紹介

## ● 出雲國風土記考證 後藤藏四郎著

本書は著者が嘗て古代の出雲國の地圖を作らうとして出雲國風土記の研究中、有名な國學者の校正を経た出雲國風土記解や出雲國風土記考にも隨所に誤謬があることに氣附いて出雲國風土記考證を發表した後、島根縣皇典攻究分所が企てた出雲國風土記本文の校訂事業に加はり、諸種の古寫本を見る機會を得て更に研究を進める。共に前に發表した考證をも訂正して、こゝに本書を出版するに至つたものである。本文の註釋は大體古來の註釋書に基いてあるが多少の新見もあり、特に地理に就いてはよく實地について綿密に考證し、從來の諸説の誤謬を訂正するところが多く、古代歴史地理の研究者に裨益する所が鮮少でない。末尾に附した索引も便利である（四六版、三九五頁、東京大岡山書店發行、價三・二〇）〔松野〕

● 西南文運史論 文學士 武藤 長平著

本書は著者が第七高等學校教授として薩南の地にありし十有五年間に舊家の祕笈を探り史蹟の實際を踏査して九州地方ミ琉球、支那、南洋、西洋諸國ミの史的關係を調査し機に觸れて藝文其他の學術雜誌並に新聞紙上に發表せられた三十七篇の論文を纏められたもので、此種の書籍の皆無なる現今の日本史學界東洋史學界の缺陷を補はれたものである。凡そ地方史の研究はその人を得ざれば概して畫虎類犬の結果を招き易い。然るに研究者にその人を得、學術的價値高き結果を得たる西南日本は實に幸福ミ謂はねばならぬ。新村博士の序文に「西南地方の分に於ては武藤君の研究から啓蒙されたこゝが多かつた」ミあり、内藤博士の序文に「君が撰著は各種の問題に涉り暗示に富み、將來の研究者を裨益すべき長所も有す」ミある通り、決してありふれた地方史書ではなく、著者の學に忠なる眞摯なる面目が躍如ミして卷中に溢れて居る。四十五葉の挿畫ミ二葉の口繪も亦美麗精巧で何れも稀觀のものばかり、眞に錦上添花を添へて居る。國史東洋史支那文學に志す士には勿論、好古の清癖ある人に

は必ずや飽かず讀まれること信ずる。(菊版五一六頁、  
價五・五〇圓、岡書院發行)〔那波〕

●大唐西域記  
に記せる東南印度諸國の研究

文學士 高桑 駒吉著

玄奘の大唐西域記に掲げられた諸地の歴史地理的研究は東西の東洋學者の夙に没頭する所のものでその中には既に確定的に考證せられたものもあるが、同書第十卷の就摩栗底國より秣羅矩吒國に至る東南印度の十個國の該研究は最も至難とせられ歐米諸學者間にも未だ首肯するに足るべき該博なる考證を試みたものがない。著者大に之に慨し多年此の方面の研究に留意する所あり、漸く自信を得たので發表したものが本書である。著者は歴史事實を基とし考古學的發見の結果を採り比較言語學を應用し之に支那佛典の記載を參考する研究方法を以て、確に從來の研究に數歩を進めたもので、東洋史學の進運に寄與する所が甚だ多い。且つ此等諸國に關係ある玄奘通過前後時代の諸王朝の金石文、その他の文献に基いて諸王朝の系譜を作成し並に參考地圖五葉を附してある。(菊刊

四〇四頁、價六・〇〇圓、東京森江書店發行)

●東洋文化の研究 文學博士 松本文三郎著

本書は最近數年間に博士が藝文その他の權威ある學術雜誌に寄稿發表せられた小論文十八篇を採次したもので佛教に關するもの十篇、考古學に關するもの四篇、藝術に關するもの四篇より成つて居る。その取り扱はれた範圍は當に支那印度のみならず遠く埃及羅馬にも互り全卷を通じて學者を裨益するものであるが、就中遂三鑿、琉璃考、ボムペイの壁畫、印度の佛像と美の思想の如き各篇は何人にも興味禁じ能はざる内容を有して居る。(四六版四五四頁、價二・五〇圓、東京岩波書店發行)

●近代支那史 文學博士 矢野 仁一著

支那數千年の歴史は近代支那に於て集大成せられ古來の文化も近代支那にて最後の高潮に達した。支那の文化は是より將に崩壞せむとす、ある。此の秋に當りて史學者を以て自ら任ぜらるる著者が史傳家註釋家纂輯家考證家支那學者特種事實研究家に倣はざる一種獨特の見解を以て執筆せられた本書の發刊を見たのは實に東洋史學

界の一大慶事であらねばならぬ。著者の本書執筆の立脚地と見解とは第一章の近代支那史の概念の條にて説破せられてあるが支那社會の固定性はよく騷亂の影響をも中性化し得る力を有し社會人民は政治に興味を有せざるの現状である。斯の如き社會が清朝初期に西洋諸國との關係を生ずるや古の道德的政治、道德的文化一朝にしてその迹を消したのである。支那社會を斯く解し支那近世の政治を斯く見る立脚地から清朝史を解釋せむと試みたのが本書の特色で全編二十三章共和政治の出現まで取り扱つてある。然れば實に専門學者の参考書として有益のものたるのみならず政治家、一般識者に對しては一種の警世的参考書と謂ふべきもので、凡そ支那を論ぜむ者は必ず一讀を要すべきものである。（菊版五六一頁、價四・五〇圓、京都弘文堂發行）

## ●老子原始

文學士 武内 義雄著

本書は著者が最近數年間に學術雜誌に發表したる莊子攷、列子窺詞、子思子に就いて、曲禮攷、曾子攷、等十一篇の研究論文に併せて多年筐底に藏し考覈を加へたる

老子原始なる一大長編を加へて世に問ふたもので支那哲學の立脚地より論述するものではあるが、その間亦支那史上有益なる考證をなす處が多く、東洋史學者も是非一讀せなければならぬ好著である。就中老子傳の一章は警拔なる見地より執筆せられ史記老子傳の大部分を疑ふべき記載とし老子の年世を周の威烈王より顯王の初年に擬したる點は學者の興味を惹く研究であらう。その外に於ても大學篇成立年代攷、桓譚新論攷等皆支那學研究者にこりて看過すべからざる好文字である。（菊版三五六頁、價三・〇〇圓、京都弘文堂發行）

## ●燉煌遺書第一集

ポール・ペリオ 羽田 亨 共編

佛國の東洋學者 Paul Pelliot 氏が曩年支那の西陲燉煌の莫高窟から夥多しい支那古文書を發見したことは世界の學界に一大衝動を與へた。これに前後に英佛露諸國の支那探検隊も亦此の地方に出かけた、我が國に於ても亦西本願寺の大谷伯爵が橋瑞超師等を遣して此の世界的探險に一指を染めた。かくして發見せられたる多數の貴重なる史料は或は佛國のビブリオテーク・ナシヨナルに、

或は大英博物館に、或は露國のアレキサンダー第三世博物館に、或は我が二樂莊に世界各處に保管せられて、専門學者はその調査にいそしみつゝある。しかしその多くは未整理のまゝであつて、未だ一般學者の研究に利用せられる程度に立ち至つて居らぬ。英國の Sem 博士發掘のものが佛國の故 Chavannes 博士によりて Documents Chinois decouvert par Amel Steh の題せられてその一部が公刊せられた時、吾人は如何にその眼福を喜んだことであらう。羅振玉氏の流沙餘簡も亦此書を翻刻した。大谷伯爵のものは曩に西域考古圖譜二卷になつて大槓が寫眞せられたが、その中の古文書の解讀説明は實に羽田博士の苦心と努力によりて彼の二樂叢書となり既にたしか第五冊まで活字に附せられた。然るに羽田博士が親しく巴里のビブリオテーク・ナショナルに於て鑑撰しベリオ博士の諒解を得て兩博士の共編の下に燉煌遺書の出版せらるゝことになつたのは實に世界學界の一大慶事であつて、ベリオ博士の雅量と好意と羽田博士の功績と又本書の出版の如き非營利的事業に對し學を愛するの志より

上海の財團法人東亞攷究會の爲したる後援は永へに記憶せらるべきである。本書はその第一集であつて大版影印玻璃版本一冊と、菊版活字本一冊とより成る。玻璃版本に收むる所は慧超往五天竺國傳殘卷、釋迦牟尼如來像法滅盡之記一卷、七曜曆日一卷、漢審對音千字文殘卷の四種で各篇何れも羽田博士の解説がついて居る。活字本の方は後漢乾祐二年沙州地志殘卷張氏勳德記殘卷、後唐長興四年五年曹議金疏後、晋天福七年曹元深疏、陰善雄羅盈達閩海員張懷慶銘讚、常樂副史田員宗啓、燉煌名族志殘卷、小説明妃傳殘卷、法成譯薩婆多宗五事論の九種を收め、これ亦各々羽田博士の解説がある。玻璃版は以て原書の面影を偲ふべく活字本は以て解讀利用の便が多い。二樂叢書と謂ひ本書と謂ひ共に羽田博士の勞を感謝せなければならぬ。(一部大小二冊、價一〇・〇〇圓、上海靶子路東亞攷究會發行、京都弘文堂賣捌)〔以上那波〕

● Hermann Oncken; Die Rheinpolitik Kaiser Napoleons III. von 1863 bis 1870 und der Ursprung der Krieges von 1870—1871.